

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

研究会基本情報

タイトル:「「わざ」の人類学的研究—技術, 身体, 環境(「もの」の人類学的研究(3))」(平成29年度第1回研究会)

日時:平成29年7月9日(日)

場所:AA研306号室

報告者とタイトル

13:00-13:30 「趣旨説明」(床呂郁哉:AA研)

13:40-15:40 「「わざ」を巡る哲学的な素材紹介 —ドゥルーズ=ガタリの技術論を中心に—」(檜垣立哉:大阪大学)

15:50-18:00 「ものが生まれ出ずる制作の現場——鉄と道具と私の共同作業——」(黒田末寿:滋賀県立大学)

概要

当日は本研究課題「『わざ』の人類学的研究—技術、身体、環境」(略称「わざ研」)の第1回研究会であることに鑑み、まず代表者の床呂郁哉(AA研)から本研究プロジェクトの趣旨説明と、参加者の自己紹介、さらに今後の共同研究の方針に関する全員による打ち合わせを実施した。その後、共同研究員である檜垣立哉(大阪大学)と黒田末寿(滋賀県立大学)による研究報告と質疑応答が実施された。このうち、まず床呂による趣旨説明は以下の通りである。

趣旨説明(「わざ」の人類学的研究—技術, 身体, 環境(「もの」の人類学的研究(3))

床呂郁哉(AA研)

本研究課題は、世界各地における「わざ」(広義の技術・技芸)を人類学的に研究していく共同研究であり、AA研で実施していた共同研究プロジェクト「『もの』の人類学的研究(2):人間/非人間のダイナミクス」(2014-2016年度)の後継プロジェクトである。今回の研究課題においては、第二期までの研究成果を踏まえ、各地における技術の諸相に即して、旧来の通念的な(ともすると近代西欧中心的な)技術観を相対化し、新たな多元的技術観を探求していくことを目的とする。

言い換えれば、本研究課題は、世界各地における「わざ」(広義の技術・技芸)に焦点を当て、それを新たな視点から人類学的に再検討することを目的としている。現代において技術が語られる際、ともすると近代西欧的な技術観が暗黙のうちに前提とされがちである。この技術観においては、主体/客体、社会(文化)/自然といった分割に基づき、人間による自然や環境への一方的な統御可能性が前提とされる。また技術に伴う筈の身体性や(生態的、文化的環境を含む)場所性などのローカルな文脈は軽視され、技術のグローバルな

適応可能性が自明視されがちである。

しかしながら、地球環境問題やそれに伴う各種のハザード、東日本大震災における原発事故、あるいは人工知能（AI）の急速な進展に関するいわゆる「シンギュラリティ」をめぐる論争などに端的に示されるように、通念的な技術観の持つ限界やリスクをめぐる認識もまた如実に顕在化している。こうした状況に鑑み、本研究課題では、世界各地における技術の諸相の実態を人類学的視点から比較検討する作業を通じて、旧来の通念的な技術観を超える新たな多元的な技術観の構築を試みるものである。

先に述べた近代（西欧的）技術観の特徴をごく雑駁に総括すれば、それは主体／客体の2項対立的な図式を前提として、主体としての人間が客体（自然・環境・「もの」ないし客体化された人間）などの対象を自らの意図や設計図に基づき操作・統御・制作できるという、いわゆる統御（設計）主義的な技術観として把握することが可能だろう。

また、そこでは技術ができるだけ身体への依存を脱して各種の器具・装置。機械などに任せていこうとする、広義の脱身体性、そして、西欧を中心に発展した近代的科学技術が世界のどの場所でも普遍的に適用可能であるとする脱場所性（普遍志向性）という2つの傾向を有することも大きな特徴としている。

これに対して、いわゆる伝統的・在地的技術においては、必ずしも事前の設計図なく「もの」との対話的なプロセスを通じた制作（非設計主義的制作）という側面が人類学者などから指摘されてきた。更に、伝統的・在地的技術の実践は、他にも身体性、場所（環境）性、即興性（対話性）、複雑性（非線形性）といったキーワードで記述しうるような特徴を強く持っていると思定できる。

しかしながら、他方で本共同研究では、いわゆる伝統的・在地的な技術に関する文化（ないし生態）人類学系の研究者だけに参加者を限定せず、各種の近代的な技術に関する研究者（たとえば地震などのハザードを含む防災技術の移転に関する研究者や福島原発事故の地域社会への影響に関する研究者等）も共同研究者に招聘して共同研究を実施するものである。この共同研究を通じて、「近代的／伝統的（在地的）」技術の二分法自体を最終的には相対化しうる可能性を検討することも本共同研究課題の大きな狙いの一つである。

なお本共同研究ではそのタイトルとして「テクノロジー」ではなく、「わざ」という言葉を採用している。この趣旨としては、本共同研究においては、必ずしも狭義の（近代西欧的な文脈における）「テクノロジー」概念だとかエンジニアリング的な技術には限定されない、芸術的实践等も含むより広義の「わざ（術：アルス）」も共同研究における比較対象の視野に含み込むという狙いがある。言い換えれば、本研究プロジェクトでは、「芸術/技術」（art/technology）という二分法の境界の相対化なども検討の対象とし、共同研究のメンバーには狭義の技術に関する研究者に加えて音楽や舞踊など芸能研究者にも参加をお願いしている。また本研究プロジェクトで技術を検討する際には、必ずしも自然・環境や「もの」など非人間だけを対象とする技術だけではなく、M. フーコーが言う意味における「統治の技法」や「自己のテクノロジー」なども検討対象に含まれる。

このように、「わざ研」は近代西欧的な狭義の（工学的）「テクノロジー」を含みつつも、必ずしもその狭義の外延に限定されず、より広義の「アルス」「技」「芸」的な側面を含めて世界各地における各種の「わざ」を具体的に比較検討していくことを目的としている。

（以上、床呂による趣旨説明の概要、終）

次に檜垣による報告の概要は以下の通りである。

「わざ」を巡る哲学的な素材紹介 —ドゥルーズ＝ガタリの技術論を中心に—

檜垣立哉（大阪大学）

本発表では、「わざ」にかんする現代思想からの知見を整理するために、ドゥルーズ＝ガタリの『千のプラトー』において描かれている「マイナー・サイエンス」の概念を軸として、20世紀から21世紀にかけての技術論のある種の総覧をおこなった。

まず、ドゥルーズ＝ガタリが、直接的に言及しているわけではないが、それとの連関を強く指摘することができるベンヤミンとハイデガーについて、とりわけその両者の技術にかんする議論を整理した。ベンヤミンの「複製芸術論」での「アウラの消滅」や後期ハイデガーにおけるゲシュテルにかんする議論は、一見すると類似しているが、政治的思想的スタンスにおいて真逆ともいえる両者のなかで、こうした主張のあり方が示す意味はさまざまに考察しうるものである。ベンヤミンにおいても、ハイデガーにおいても、現代技術批判をおこなっている点ではかわりはないが、そこでさまざまな揺れがみられること（とりわけベンヤミンが現代芸術にやはり強い価値付けをなし、そこに別の可能性をみようとしていること）、そしてそれと同時に、この時代に技術やわざを論じることが、身体性のみならず、国家や政治、また救済としての芸術という諸テーマにかかわるものであること、そしてその構図は現代思想のさまざまな場面に通底するものであることを明確にした。

ついでドゥルーズ＝ガタリの『千のプラトー』におけるマイナー・サイエンスにおける技術論とそれにまつわる諸主題を考察した。マイナー・サイエンスは、国家を支えるメジャー・サイエンスに対抗し、メジャー・サイエンスがある規範を設定するものであるのにたいして、事物の固有性に関連する「わざ」のあり方と関連するものであり、ドゥルーズ＝ガタリ自身のノマドや戦争機械の議論と深く結びついている。とりわけそこでの冶金術師やその集団的形態の分析は、金属としての生というドゥルーズ＝ガタリ自身の主張にもつながるとともに、マイナー・サイエンスや、それがもつ「わざ」の具体例を示すものである。そこでは技術やわざのあり方が、ある種の身体性と関連しつつも、主体のもつ能力というよりは、よりひろく自然やネットワーク性に結びついた方向に展開し、さまざまな議論を喚起しうるものとなっていること、そしてそれが国家という形態ともちろん共存関係をもちながらも、それがもつ統治のあり方とは別の生の姿を探るものであることにとりわけ着目した。

さらに、こうしたドゥルーズ＝ガタリの議論のなかで、考古学者で自然人類学者でもあるアンドレ・ルロワ＝グーランや、哲学者ジルベール・シモンドンの成果がもちいられていることも技術論やわざを考えるうえできわめて示唆的である点も指摘した。ルロワ＝グーランの考察は、独自の自然史的な人類進化の展開と技術との連関について深い考察をなし、技術自身が自然進化や生態系の中に深く根ざして成立してきたことを示している。また個体化の論者として知られるシモンドンは、技術論についてもさまざまな議論を提示し、ある種の技術の自律的展開について論じている。これらの論者は、いわば技術論の全面に出てくることの少ない者であるが、ドゥルーズ＝ガタリ以降の技術論の展開を考える際にも再びとりあげなおす必要性を強調した。

こうした議論は、ドゥルーズ＝ガタリを経て、現代におけるブルーノ・ラトゥールを中心とする科学人類学の展開などにも強い関わりをもっていることは明確におもわれる。今回の発表ではそうしたドゥルーズ＝ガタリ以降の展開についてはあまり触れることができなかったが、研究会の発端として、ひとつの論じるべき方向性は描きえたといえる。そこではわざを考えるときにもすれば主体の能力に還元されがちな方向性から、わざそのものの自然性や環境とのネットワーク的連関、国家との関連、また芸術との繋がりなどが考えられるべきテーマとしてとりだされた。

(以上、檜垣による報告の概要、終)

二人目の発表者である黒田による発表の概要は以下の通りである。

ものが生まれ出ずる制作の現場—鉄と道具と私の共同作業—

黒田末寿 (滋賀県立大学)

滋賀県の農鍛冶に弟子入りした経験から、鍛冶の基本工程と現場における制作者・道具・素材との関連について報告した。そこでは、ものがアクターに転換する(床呂・河合 2011)源であるともいえる人間と道具の対称的・相互補完的關係が認められる。鍛冶は、熱した鉄を打ち変形・加工・鍛錬して鉄製品をつくる作業で、農林業用具の制作・修理にかかわる鍛冶を農鍛冶、野鍛冶と言った。その基本作業として、炉で鉄片を熱し鎚で叩いて鍛錬・変形・成形する火作りと、地金と刃金を接合する刃物づくり、刃金の堅さを調節する焼き入れ・焼き鈍しがある。師匠の松浦さんは火づくりの手本を見せてくれ、私はいくつかの製品を作りながら鍛冶の初歩を学んだ。

鉄棒を熱して叩き延ばすための炉と鉄の適度な温度は、色や輝きとハンマーで打ったときの音、反発でわかるようになった。適切な強さでハンマーを正確に振り下ろすことが難しかったが、私は、アレキサンダー・テクニークで学んだ方法、「ものが私を呼んでいる」と意識することによって正確な打ち方ができるようになった。それは「ものを動かす」主

体が「私を呼ぶもの」の要求にしたがう私になることで、ものとともに自由になる技法といえる。師匠の松浦さんも雑念が湧くと手元が狂うので念仏を唱えながら打ったと言う。鍛冶は私が行う作業ではあるが、主体が前面に出てはならない、鉄と道具と私の共同作業である。

松浦さんは、相手が道具を使う場所、好みや利き手と体格に合わせて道具を作るだけでなく、相手の熟練度と性格を推し量り刃の厚みや焼きを調整した。修理に戻った道具に不具合があれば、その非が使用者にあるとわかって松浦さんは「お恥ずかしい仕事をした」と恥じいった。それは相手の性癖を十分に汲み、少々無理をしても刃こぼれしないものをつくれぬ自分を未熟と自覚してのことである。そして修正・再修正を繰り返すことで鍛冶技術と調整力が向上し、使用者も自己用の道具を使いこなすようになってくる。未熟の自覚は多くの鍛冶屋に共通し（佐藤 1979）、これこそが相手と道具の声に耳を傾けさせ、あくなき工夫に向かわせる力であり、過剰な私を捨てることと同じ態度である。

制作を道具やものとの共同作業ととらえることは、床呂（2011）が言う対話モデルに当てはまり、他にも陶磁器制作や彫刻などを例にあげることができる。例えば、陶器作りで土練りと成形は土と相談しながら行う土との共同作業で、茶碗や皿の形にするには土を締めつつ薄く引き延ばすが、このコツを職人は、「土をだまし、だまし、伸ばす」と表現する。

こうしたものを主体にするとは、私たちが、製品が完成した場面では「つくった」というより「できた」と言うことにも現れている。「できる」という自動詞の使用は作られたものに焦点を当て、制作者の主体を背景化する。「できる」は「いでく」の頭音が脱落して「でく」になった（小学館 2006）。つまり原義は、姿の見えなかったものが姿を現して出てくる、出現する、生じる、生まれる、であり、ものが作られる現場で「できる」を使うことは、「生まれ出ずるもの」という認識の存在を示唆している。これによれば、いわば、鍛冶屋は鉄が道具の形で生まれるよう導く助産者になり、鍛冶を鉄・道具との共同作業に感じる感覚や自己の未熟の自覚と通じる。

ものが生まれ出ずるバリエーションに彫刻がある。彫るは掘るに同じである（小学館 2006）。そこから、彫るは木や石を溝や孔を掘っていくことの他に、埋まっているものを掘り出す、つまり木や石にすでにある形象を掘り出すという意味が含意されているという解釈が可能である。このことを如実に表す例として、木に仏性を観てとり、それを像にしたと言われる江戸初期の円空、また円空に共鳴し古木にある木仙に従って造形するとした彫刻家橋本平八をあげることができる（本間 1974）。

「ものが生まれ出ずる」のであれば、ものはできあがった後も生きものとして成長する可能性を秘めている。それは鍛冶物がさらなる修正と改良＝成長を前提として作られること、つまり未完成品であることに通じる。この成長のドライブは鍛冶屋の未熟、つまり自らが成長途中であることの自覚によっていた。伝統建築においてはこのことに類似する、建築物に未完の印を置く習わしがある。有名な例は左甚五郎の設計・施工とされる日光東照宮、京都の知恩院の葺かずの瓦に見られ、これらは、「完成したものはもはや滅びゆくのが

世の習い」という考えに基づくと説明されている。だが、左甚五郎もやはり自己の技量を未熟とし、生涯、技術の研鑽に努めたとされている。これをたとえば未完の思想と名づけたとして、ものが生まれ出ずる文化のひとつに位置づけることができる。

もの作りや道具の扱いは、ものの性質や形状を感覚する5感を磨き実践を繰り返さないで上達しない。私の経験では、そうした優れた結果を生むには過剰な主体を捨て、もの言うことを受け止め応える、受け身の主体になることが大事だった。この関係の取り方が、ものを深みのある実体として浮かび上がらせる。それは、ものが出ずる多彩で豊かな世界の立ちあがりであり、制作者もそこで多元的な感覚を身につけるのである。この意味の成長に対比できる現象は、認識行為一般に起こりうる。ものとの共在感覚・共生感覚こそが、ものを主体に引き上げ、世界を豊かにすると考えられる。

参考文献

本間正義(1974)『円空と木喰』ブック・オブ・ブックス 日本の美術 35, 小学館.

佐藤次郎(1979)『鍛と農鍛冶』産業技術センター.

小学館(2006)『日本国語大辞典』.

床呂郁哉・河合香吏(2011)「なぜ「もの」の人類学なのか？」『もの人類学』床呂郁哉・河合香吏編, 京都大学学術出版会:1-21.

(以上、黒田による報告の概要、終)

なお各発表に続いて参加者全員による議論が実施された。檜垣報告に関しては、ドゥルーズの技術論における冶金技術の占める特権性（なぜドゥルーズはとくに冶金術をテクノロジーで中心的な事例として挙げたのか）などの点をめぐって議論が交わされた。黒田報告に関しては「ものが生まれ出る文化」の可能性とともに、それがともすると神秘化された語りに陥ってしまう危険性もあるのではないか、などの疑問点も提起され、報告者とメンバーの間で活発な議論が行われた。

(以上、終わり)